
矛盾恋愛

椎名 めぐみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

矛盾恋愛

【Nコード】

N9914G

【作者名】

椎名 めぐみ

【あらすじ】

一度も告白を断られた事の無い男と、一度も告白を受け入れた事の無い女。交わる筈の無い二人が交わった時、その結末の形は。

事の予兆はシンクロシニティ

昔々、遠い昔。どこかの国の行商人。

旅行く先々で行商人は、自慢の商品を携えて声高々に言います。

『さあさあ、よってらっしゃい見てらっしゃい！ なんでも貫く最強の矛と、どんな衝撃も防ぐ無敵の盾！』

右手に矛を、左手には盾を。魅力的な言葉と共に掲げられたその二つの周囲には、自然と人だかりができたとか。

『ほら、今買つとかなないと後悔するよ！』

行商人がそう言うのと、人々は慌てて買い求めます。矛だけではなく、盾だけでもなく。人々は必ず、二品一対で買っていきます。何物にも負けない矛と盾。それらを両手に帰ってゆく人々の表情は、とても晴れやかであったとか。

ところが、そこにはどちらかしか買えない少女が一人。少女は悩み込んだ拳句、困った末に言いました。

『それで、これはどつちが強いの？』

2009年、日本。近代的な街並みには、けたたましい喧騒。
「鋒原！」

自分を呼ぶ声がして、鋒原は後ろを振り返った。

鋒原 光16歳、高校二年生。

「よ。何やってんだよこんなところで」

高校生男児には不釣り合いな程に綺麗な肌、毛先が愛らしくハネた少し長めの茶髪。

そしてその顔立ちの良さは、どこを探しても並ぶ者無し。

「何って……」

時を同じくして、やはりけたたましい街並みの中。

「かーおちゃーん」

少し恥ずかしい呼び名に照れ臭そうにしながら、その女性は後ろを振り返る。

縦妻 香織、16歳。高校生活二年目の春。

「一人なんて珍しいね。何やってるの？」

ショートカットの栗毛は愛らしすぎる程に愛らしく、女性の中でも少し低めの身長にとても良く似合っている。

しかしてその整った顔立ちは、周囲の異性の目を惹くには充分すぎる。

「何って、」

「あー、デートかな？」

友人Aがそう言うと、香織は頬を赤くした。

「デートの待ち合わせだけど。健全な高校生男児なら当たり前じゃん」

光は、腕時計をトントンと指で叩きながらそう答えた。

「……、相変わらずお盛んなことで」

友人Aは呆れたように視線を逸らした。

「まあ、お互い楽しもうじゃないか。お前も当然デートなんだよね？」

「バカな事言わないでよ！！ そんな事する訳無いじゃん！！」

香織は頬を真っ赤にして、デート疑惑説を否定する。

友人Aはそれが面白いといった風に笑った。

「そんなに必死になって否定しなくても良いのに」

「いきなりバカな事言うからでしょ！ 今日ほただ参考書買いに来ただけだから！！」

「分かってますってば。香織がデートなんてする訳無いじゃん。頭のネジが数十本狂ってて男嫌いなんだもんね」

友人Aは香織の肩をポンポンと叩きながら、笑った。

「……、ただちよつと苦手なだけだってば」

鋒原 光16歳。その容姿に見合った性格で、幼少の頃から異性に振られた事など一度も無い遊び人。

縦妻 香織 同い年は、小さい頃から数多に受け続けてきた異性からの告白を、一度もOKした事の無い鉄壁女。

交わる筈の無いこの二人が出会うのは、あとほんの少しだけ後の話で。

奇跡は意外と起こりうる

「ねえ、今度どこか二人で遊びにいかない？」

鋒原 光は、こと女に関して遠慮を知らない。

「もう。私彼氏がいるの知ってるでしょ？」

何故なら、自分は女性から愛される人間だと理解しているからだ。
「別に良いじゃん、遊びにいくくらい。何なら俺と付き合っちゃっても良いしさ」

「縦妻さん、俺と付き合って下さい！」

縦妻 香織はなびかない。いかなる誘惑にも、どんな口説き文句にも。

「あ、あの……ごめんなさい。付き合えません」

何故なら、興味が無いからだ。そうやって異性を避ける内、いつしか本当に異性との付き合いが苦手になってしまったのも事実だ。

鋒原光と縦妻香織は、絶対に仲良くなれない。ましてや付き合うなど、想像の中で思い描く事すら難しい。

「香織ー。この前の塾の話、電話入れときなさいよ」

香織の母、彩乃は言った。

「あ、そうだった。ありがとお母さん」

香織は、大学受験に向け学習塾に通う事を考え始めていた。そこで、前々から勧誘の電話の来ていた赤羽ゼミナールの体験講習を受ける事にした。

「お母さん、赤羽の電話番号わかる？」

「その辺にパンフレットあるでしょ」

彩乃は電話台のあたりを指差した。

「ありがとう」

香織は赤羽ゼミナールのパンフレットを左手に持ち、受話器を頭と肩で挟むと右手で電話番号をダイヤルし始めた。

一つだけ。ここで予め言わせてもらうと、香織は注意力の足りない人間ではない。普段からおっちょこちょいな部分がある訳でもないし、徹夜明けの朝でもない。

「もしもし」

電話に出たのは、若い男。その後に「赤羽ゼミナールです」と続かなかつたのを香織は少しだけ不思議に思ったが、そのまま続けようとした。

「あの、以前からお電話いただいていた縦妻ですが」

香織がそう言うと、電話の向こうの男は怪訝そうに「はい？」と聞き返してきた。

予想外の応答。瞬間香織は言葉を失い、頭の中で現状を理解しようとした。　とは言え、この状況で考えられるのは間違い電話ぐらい。

「あの……、赤羽ゼミナールさんですか？」

電話の向こうの男は、少し黙った。

「……いえ、鋒原です」

電話の向こうの男、改め鋒原光は、億劫そうな声でそう言った。しかし、この現状を飲み込むと光は、電話の声が若い女である事から興味を持ち直した。

「間違い電話？」

光は優しく、気さくに笑いながら話しかけた。

「そ、そうみたい……です。ごめんなさい」

「いやいや、全然。むしろ俺こういうのって結構好き。どこの誰とも知らない相手と偶然関わりを持つっていうさ」

言うまでも無いながら、光の場合のそれは異性相手に限る。

「は、はあ……」

香織は戸惑った。ただ普通に間違い電話でした電話を切らせてくれれば良いのに、相手の男が何故か話しかけてきたからだ。

「どこに住んでるの？ 高校生？ あっ……いや、いきなりこんな事聞くのって失礼すぎるかな。はは」

「……………」

香織は無言を返した。そして、悪気がある訳では無かったが、突然今の状況が怖くなり、

「ごっ、ごめんなさい！ 間違い電話でした！」

そう言って、一方的に電話を切った。

「ツ……、ツ」

光の耳には、電話の機会音が寂しげに繰り返る。

「クソッ！」

光は、苛立ちを隠す事なく受話器を放り投げた。

夜、鋒原家。

光はまだ、昼間の間違い電話の事が気になっていた。これも何かの縁、もし相手の女が美人だったら取り逃がしたのは悔しすぎる。昼間はお互い何も知らなすぎたから警戒されたが、向こうの女も自分の顔を見れば仲良くなりたと思うに決まっている。光は、冗談でも何でも無く本気でそう考えていた。

「光ー。電話空いたわよ」

鋒原光は麻雀に興味がある。

だからこの時、自分の携帯電話でなく家の電話を使うに至ったのは、自分の携帯電話は今麻雀のゲームを起動していたからである。そして、一つだけ。ここで絶対に言っておかねばならないのは、

光は香織の電話番号を控えていないということ。間違い電話であつたし、普通に生きていれば二度と関わる事も無いであろう相手。そんな番号を控えておくのも気持ち悪いと思つたし、別にその必要性も無かつたから。

だから、この結果は偶然である。

「はい。縦妻です」

一瞬、光は受話器を落としそうになつた。唇が痺れ、頬は震える。女友達の元に掛けるつもりだつた光は、この信じられない出来事を夢か幻のもののかとも。

光は、香織の元に間違い電話を掛けた。一体、どういう確率で奇跡が重なればこういう事が起こるのだろうか？ 光は神という概念を特別信じている訳では無かつたが、この出来事を神の仕業で無いとするなら、宝くじで一等当てる方がどれほど簡単か。

「もしもし？ どなたですか？」

香織の声で我に返ると光は、小さく笑つた。

これが、鋒原光と縦妻香織の初めの出会い。まだまだ互いの事など何も知らない、受話器越しに言葉を交わしてみただけ。

運命の糸は手繰り寄る

（縦妻……）

翌日、光は間違い電話の相手の事を考えていた。顔どころか、下の名前すら知らない。そんな相手の事を気に掛けるなんて、光は自分で自分の事をおかしく感じていた。

（……会ってみたいな）

それは、勿論恋愛感情からくるものではない。ただ、単純に胸をくすぐる好奇心。

（まず、市外局番をダイヤルしてないのに電話が繋がったって事は、少なくとも市内に住んでるって事か？）

光は、北海道札幌市に住んでいる。

（札幌市在住、名字が『縦妻』……）

そう考えると案外絞られるように思われたが、そもそも年齢が分からない。それでは探す範囲が広すぎる。

（……………）

結局、もう一度電話してしまうのが一番手っ取り早い。今度は一応番号を控えてある。

（でも、それやったら完全にストーカーだよな……。向こうは俺の事なんか何とも思っていないだろうし。顔見てもらえれば別だけども）

そうして、答えの出ない自問自答を繰り返しながら光は、その日眠りについた。

翌朝、光は学校に向かって自転車を漕いでいた。朝の通勤ラッシュで道路が騒がしい時間帯だが、光はそういう喧騒が嫌いで普段からなるべく避ける様にしていた。

「いや、いるいるそーゆー奴！　どんな暑くてもワイシャツのボタ

ン一番上まで閉めてんだって」

信号待ちで自転車漕ぐのを止めていると、すぐ傍の連中の会話が聞こえてきた。

「大体、クラスに一人は『あー、こいつはワイシャツのボタン一番上まで閉めてそう』ってキャラの奴がいて、あとそれ以外にも二人ずつくらいは人知れず一番上まで閉めてる奴がいるんだよね」

「あー、分かる分かる！ 大体そんな感じの割合に落ち着くんだよね」

(……………なんだこいつら……………)

光は、意味不明な会話で盛り上がっている男子生徒二名を心底気持ち悪く感じていた。

「あと、女子はスカートとかね。たまにいるよねー、何が何でもスカートは膝下を守る奴」

(……………)

光は、とりあえず引き続き話に耳を傾ける事にした。

「実際これはほとんどいねーけどな。せいぜいクラスに一人ずつくらい？」

「まあそれぐらいいれば良い方だろうな。俺らのクラスもみんなスカート短いし」

光は、それは別に良いだろと思っていた。

「あ、縦妻とか！ あいつは絶対スカート短くしたりしねーよな」
(！)

「あー、縦妻。あいつ相当美人なのにスカート短くしてくれないかなあ。縦妻以外で誰か女子二十人ズボンにしても良いから縦妻はミニスカにして欲しい」

「いや、縦妻がミニスカートにしてくれるんだったら俺ワイシャツのボタン一番上まで閉めるよ」

そんな話をしながら、二人の男子生徒は楽しそうに笑った。

(縦妻……………！ 高校生？)

二人の男子生徒は詰襟の学生服を着ている。

（くそ……、さすがに校章は見えないか）

ボタンに刻まれた校章までは見えなかったが、香織の通う高校では男子は詰襟だという事は分かる。

（この辺りで詰襟の高校っていうと、北高、古川、丘玉……）

信号が青になり、二人の男子生徒は自転車を漕ぎ始めた。

（縦妻……）

勿論、彼らの話している「縦妻」が間違い電話の相手と同一かどうかは分からないが、とりあえず光は男子が詰襟の高校に通っている女生徒に絞る事にした。

問いの答えは神のみぞ知る

「お前、縦妻つて奴知ってる？」

それ以来光は、仲の良い友達にそれとなく聞いて回るようにしていた。今、同じ部活の東間という男に質問したので八人目。

「縦妻？ ……縦妻つて、縦妻香織？」

光は、困った様に口を尖らせた。

「……下の名前は知らないけど、多分そいつ。……知ってんの？」
部活動の帰り道、光と東間の二人は肩を並べて自転車を漕いでいた。

「ああ」

東間は頷いた。

「小中と同じ学校だったしな。つーか、普通に有名人だぜ」

「有名人？」

光は思わず繰り返した。

「ああ。超がつく程の美人で、小中学校と九年間通してもダントツ。今も普通に他校で話題になるってさ。……つーか、お前が今まで香織の事知らなかったって事に俺は驚きだよ」

(……………)

光は無言を挟んだ後に、

「彼氏とかは？」

と、訊いた。

「あー、ダメダメ。香織はどうにもなんねーよ。今まで何十回告白されてきたのか知らんが、とにかく一度もOKしないんだから。今じゃもう、周りも諦めてて手は出せないってさ」

あの日、電話越しに言葉を交わした時の事が光の脳裏に蘇る。

光は不満気に眉間に皺を寄せた。

「俺でも？ 無理？」

光は真顔でそう聞いた。すると東間は答えに困り、言葉を詰まら

せてしまった。

「あー……。いや、多分無理だとは思うけど……お前も普通の奴じゃないからな……」

光は真剣な目つきで東間を真っ直ぐ見据えながら、答えを待った。

「うー……。ん、それはお前らが実際に会ってみないと分からないな」
「……………」

そもそも、光は香織の事など何も知らない。だから、「もし俺が告白しても無理？」という質問は仮定中の仮定の話で、まだ光は香織の事など好きでも何でも無い。光を突き動かしているものは好奇心と、あの間違い電話に何かを感じたからだ。

『実際に会ってみないとわからない』

その東間の言葉が、いつまでも光の中に残っていた。

「……………」
「………そう、今どこ通ってるの？」

その光の問いに、東間は「北高」と答えた。

人の感情はねじれあう

今、鋒原光に正式的な彼女はいない。とは言えそれは成り行きではなく、光が意図してそうしているものであつて、その気になれば彼女の一人や二人すぐに出来てしまうだろう。そうしないのは、彼女を作ってしまうと色々と行動に制限が掛かると、他の女子の寄り付きが悪くなるからである。

しかしその結果、女友達の数は一極端に多い。光は休日にはそれら一人ずつと遊びにも出掛けるし、互いに家を訪れたりもする。無論、これだけ異性から人気の高い光がわざわざ「美人じゃない」女子と仲良くする理由は特に無く、女友達のほとんどは他の男子生徒が羨む様な美人ばかりである。

その中の一人に、類家 真央という女がいた。

真央は光の友人達の中でも特に容姿が優れていて、学校が違う事もあり光は重宝していた。今でも一週間に二回は会っているし、光が家を訪れる回数も多い。……しかし、そもそもなるべく秘密裏に会うようにしている事と、学校が違う事とで光は真央が普段学校でどういう生活を送っているのかをほとんど知らなかった。

類家真央は、言ってしまうえば少し頭がおかしかった。一人称が「まあ」である事は周囲から白い目で見られる原因となっていたし、以前学級日誌に『魔法のエンピツ』と称して自身の恋愛談を書き記した時には学年中がその存在を知る事となった。

そういう事をするのが「頭がおかしい」と判断する根拠なのではなく、「こういう事をすれば周囲がどういう反応をするか」を考えられないのが真央の決定的欠陥である。だから、友人と呼べる人間がほとんどいなくなつてから慌てて自身の行動を改めたものの、それは既に遅すぎて、今では同じように周囲から拒絶されている連中と仲良くするしか真央には残されていなかった。

そんな頃に、真央は光と知り合った。その頃には既に真央の外見

的性格には修正がかかっていて、またそういう真央の過去を知る機会も特に無かったので、光は真央の内面についてしつかりとは知らぬまま付き合いを始めた。

変な行動をしない真央は一女性として素晴らしく魅力的で、光はとても気に入った。多くの時間を二人で過ごし、メールや電話などもどれだけ繰り返したか分からない。二人は正式に彼氏彼女の付き合いを交わした訳では無かったが、やっている事はそれとほとんど違い無かった。

しかし類家真央は、自分が美人だという事を客観的に理解していた。

これが何よりも厄介であり、最大の問題である。長く二人の時間を過ごししてきた真央は、自身の容姿からして当然光も自分の事を愛してくれていると信じ切っていた。付き合い合わないのは、その方がお互い気楽に会えるからだと考えていたし、それらを疑う事など微塵も知らなかった。

結果、自分は光の女友達の中でも群を抜いた存在であり、光に一番愛されているものだと思い込んでいる。だから真央は、光が他の女性と会う事を許さない。それに対して怒る権利が自分にはあると考えているからだ。とは言え、実際に光が他の女子と遊んでいるのを目撃してもその怒りを爆発させる事は出来ない。そんな事をして光に嫌われてしまうのだけは避けなくてはならないからだ。

だから、そういう時は真央は張り裂けそうになるまで胸の底にストレスを溜め込み、一人でいる時に爆発させる。人形の頬を引き裂いたり、兄が昔使っていた金属バットでコンクリート塀を力の限り殴り続けた事もある。

けれど、光はそれを知らない。光の認識では真央は、普遍的な性格をした美女なのである。

「うそー！？ そんな事あるの！？」

詩織は思わず声を大きくした。ある朝の教室、青川詩織と縦妻香織は机越しに向かい合って話している。

「う……、うん。この前ちよつとね……」

香織は少し恥ずかしそうに顔を俯かせる。

香織は、あの日の間違い電話の事を友人の詩織に何となく話してみていた。ただ、世間話をするようなつもりで。

「すっごー……。そんな事ってホントにあるんだ」

詩織は目を丸くして驚いている。

「えっ、その相手の人の名前とか聞いてないの？」

詩織がそう聞くと、香織は恥ずかしそうに口を尖らせた。

「あ……えっと、確か鋒原……って言ってた。多分だけど……」

「ええ！？ 鋒原って、鋒原光くん！？」

詩織は再び声を張り上げた。

「えっ……、下の名前は知らないけど」

「うそーっ、その人超有名人だよ。ジャニーズ顔負けのイケメンだって皆話してるんだから」

「いや、顔とかは別に……どうでも」

香織は顔を赤くした。

「なーに言ってるの。そんな事があつたんなら、もしかしたら光くんも香織の事意識してくれてるかもよ？」

「ちよっ……！ だからそんなんじゃないってばー！！」

香織は怒りすら感じさせる程に否定した。

「まあまあ。香織も男嫌いを直すチャンスじゃん。光くんに仲良くしてもらいなさいって」

そう言って詩織は笑いながら香織の肩を叩いた。香織はその手を

叩き落とすかのように払い、詩織は今度は香織の腰回りに抱きついてじゃれ合う。そうして、二人は馬鹿馬鹿しくも楽しそうに笑っていた。

そんな二人の会話を、真央は教室の隅から睨む様にして見ていた。

偶然是二人を引き寄せる

五月二十日、夜。光は自宅で携帯の液晶画面に向かっていた。

各学校には、学校公認の公式サイト他に、非公認に経営されるクラスホームページというものが必ず存在する。そこにはクラスの生徒達のプロフィールや日記が掲載されており、クラス内、またはクラス同士の交流の為に利用されている。

同時に、それはまた他校の生徒や一般人も自由に閲覧出来る為、本名をフルネームでは記載せずに下の名前だけ、もしくはニックネーム等を用いている場合もある。

……とは言え、一学年320名、内約160名の中に『縦妻香織』という同姓同名の二人がいたりなんて事は無いだろうし、また『香織』と下の名前だけの場合でも、せいぜい該当者は二人や三人程度だろう。

光が、学級サイトを一つずつチェックし始めてから約二十分。札幌北高校二年七組。その、在籍生徒プロフィール一覧。

『32 たてづま かおり』

そのクラスでは、平仮名ながらもフルネームを記していたのがとても良かった。漢字で下の名前だけ書かれるよりはこちらの方が断然良い。

(……たてづま、かおり……)

光は、プロフィールへのリンクをクリックした。

【HN】 かおり

【趣味】 音楽

【職業】 女子バスケットボール部のマネージャー。全然役に立てな

い……。

【とにかく主張したいこと】もうちょっとで大会！ ほんのちょっとでも役立てるようにがんばりたい！！

それは、良く言えば要点がまとまっていて、悪く言えばただ簡素だった。

日記ページの生徒名一覧から香織の項目をクリックしても、何も表示されない。恐らく、このプロフィールもクラスメイトに頼まれてさっさと作ったものなのだろう。光はそう考えた。

（こういう事にはあまり興味無いのか。それにしても、女バスのマネージャー……）

男子バスケットではなく、女子バスケット。光はそれに対して非常に好印象を抱いた。

（……縦妻香織、か……）

体育館の広い天井に、バスケットのボールが浮かぶ。

それは綺麗な弧を描いて空を飛び、そのままバスケットのゴールのネットを揺らした。

「ナイツシューー！！」

コートの外の一年生達が館内に声を響かせる。

「調子良いな、光」

東間は光の頭を叩いた。

「大会前だから……」

光は、そう言う間という間に東間のマークを引き剥がした。フリーになって、味方からパスを貰って、打つ。その一連の流れからは、表現し難い気迫が感じられる。

「……やっぱりレギュラーともなると気合いの入りが違うな」

「別に……」

光のそっけない応答に、東間は小さく笑みを浮かべた。

「そーいや、一回戦の相手どこだったっけ？」

「……北高」

光は、マークマンの東間と向かい合いながら答えた。

「それは、お前の気迫と何か関係あるのかな」

東間は、右手でパスを受け取った。その次の瞬間にはもう左手が添えられ、流れるかのようにしてシュートを放つ。

光は高く跳び上がり、そのボールを豪快に叩き落とした。

声援を送る一年生達の方から、わっと歓声が湧き上がる。

「……別に、何も」

その日は着実に近付いてくる

「ウツソ。今年って男女同じ会場でやんの？」

東間は驚いたように目を丸くした。

部活終わりの帰り道、光と東間はいつものように肩を並べて自転車漕いでいる。いつものように、と言うのは光が女友達と会わない日の事に限るが。

「ああ。と言うか、隣接してる体育館だけだな」

「……………。ふーん、それであんなに気合い入ってたわけね」

東間は可笑しそうにやけてみせた。

「別に…………」

光は目線を逸らした。

「まあ、じゃあとにかく当日はなるべく俺の傍にいろよ。香織を見かけたら教えてやつから」

「ああ」

光は、なるべく無関心を装いながら答えた。…………高体連まで残り一週間。

「か、香織ちゃん。これ、補充お願い」

汗が垂れる髪、一目で分かる程に濡れたユニフォーム。

「あ、はい！ すいません」

北高女子バスケットボール部三年、西本はポカリのタンクを香織に手渡した。

それを受け取った香織は急いで水飲み場の方へと走り出し、その背中が見えなくなってから、西本はその場にどさりと崩れ落ちた。

「に、西本さん大丈夫ですか？」

一年生が傍に駆け寄る。

「……あ、い、いや全然。単純に疲れちゃっただけ」

西本は笑顔を作り、平気である事をアピールした。

「……ちょ、ちよつと気合い入りすぎ……」

「彩……」

三年、村山 彩子はまるで死人のように西本の横に倒れ込んだ。

「……そりゃ気合いも入るよ。最後の大会だもん」

「そ、そうなんだけどね」

彩は仰向けになつて笑った。

「……私達、恵まれてるよね」

少しでも呼吸の落ち着いた西本が、唐突に切り出した。

「どうしたの？ いきなり」

彩子は体を僅かに起こした。

「……親とか先生たちとか、本当にたくさん応援してもらったな
って……」

「うん」

恐らくは汗だろうが、西本の目元から垂れる水滴が彩子には涙にも見えた。

「支えてくれる一年生達もいるし、マネージャーもいる」

「……うん」

体育館の扉を開いて、香織が駆け込んでくる。

「これで頑張れなきゃ、嘘だよな」

西本は立ち上がり、崩れたユニフォームを整えた。

「……うん」

高体連まであと六日。

そしてその日は訪れる

「あら。鋒原さんお出掛け？」

爽やかな日差し、時折吹く心地良い風。

光の母、栞は外行きの装いで駅へと向かっていた。

「ええ、ちよつと光の応援に。今日部活の大会なもので……」

栞は笑顔で答えた。

「まあ。それは頑張つて応援しないと」

「いえ……、全然そんなじゃないんですけど、今年はなんとかレギュラーになれたらいいのでそれならと思って」

栞は遠慮がちに話した。

「どこの高校に通ってるんですたっけ？ 光くん」

「開清高校です。光の話では、バスケット部も全然強くないらしくてまあ、あの子がレギュラーになれてしまうんですから」

栞が冗談交じりにそう言うと、二人は笑った。

「頑張ってくださいね、応援。私も勝てるように願ってますから」

「ありがとうございます」

栞が軽く頭を下げると二人はその場で別れ、栞は再び駅へと向かった。

「いいか。今日は三年生にとって最後の大会になる」

札幌北高校女子バスケットボール部、監督柏木。彼女達は試合前、最後のミーティングを行っていた。

「今日まで、皆本当に頑張ってきたと思う。三年生は二年間、二年生は一年間」

西本や彩子ら部員は皆真剣な眼差しで柏氣の話を聞いている。

「でも、そこに差なんて無い。一年生も二年生も三年生も、頑張ってきた期間が違うから『今日』に対しての意気込みもそれ相応にしくなくちゃならないなんて事は無いはずだ。スタメンはプレーで。ベンチに入れた選手はいつでも出られるような気構えを。一年生は、今日は裏方の仕事になってしまいが常に何か仕事が無いか気を配り続ける。全員で、一つになって勝利を掴もう」

話が進むに連れ、体育館の熱気が膨らんでゆくように感じられた。「そして、全員。この大会が終わった後は暫く出せなくなっても良いから今日はとにかく声を出せ」

「はい！！」

部員達は張り裂けそうな程の返事を返した。

「……マネージャーも。今日は頼むよ」

「はい！」

その中には、当然香織も。

「よいいこう！！絶対に勝つ、その気持ちを最後まで忘れるな！！」

パン！ 柏木は手を叩き、選手達をコートへと送り出した。

そして、隣接するもう一つの体育館。

男子の声は体育館中に充満し、その熱気がこれまでの激戦を物語る。

既に試合を終えた選手達は、満面の笑みを浮かべていたり、涙を膝に埋めていたり。

それでも、そんな選手達の事情などお構いなしに、試合は次々と進んでゆく。

開 清 4 3 1 0 8 札幌北

また一つ、選手達の足跡が刻まれてゆく。

そしてその日は区切りとなった

何も出来ない。

リバウンドも取れないし、シュートも打てない。ドリブルでディフェンスを抜く事も出来ないし、ブロックも出来ない。

光は、かつてない程の絶望感と自らの無力さを味わっていた。北高と開清、両校の間にさほど大きな実績の差というものとは存在しなかったが、その実力差は歴然だった。

（くそっ……！）

光は、味方からパスを受け取ると半ば強引にシュートの体勢へと入った。

弧を描き、ゴールへと向かう……はずのボールは、敵がブロックせんと伸ばした右腕に阻まれる。

（……………！）

光の場合は、運も悪かった。光はまだ二年生という事もあり、レギュラー五名の中では実力不足も否めない。片や、光のマンツーマンの相手は北高の主将でありエース。その差は素人目に見ても歴然だったし、光自身も理解していた。

かつてない屈辱、無惨なゲーム展開。

けれど、光が顔を上げられなかったのは。

縦妻香織が、自分の試合を見ているかもしれない。自分の高校の勝利を願いながら、この試合を見に来ているかもしれない。

『開清の１１番の人、情けないなあ』

そんな風に思われているかもしれないと思うと、光は二度と顔を上げる事は出来なかった。

自分のこんな情けない姿を、縦妻香織に見せたくは無かった。
……北高のエースを相手に張り付き続けた脚はもはや限界で、
そして光はベンチに下がった。

「……俺、不真面目だったよな……」

光は、東間と二人で階段に座り込んでいた。

「……………」別に、普通だろ。お前は頑張った方だよ」

東間は光の方に顔を向けたりはせず、そのまま答えた。

光は下げた頭を上げようとはしない。だらりと垂れた前髪が、その顔を覆う。

「不真面目だったよ、俺。……デートだからって練習サボったり、大会前だけ変に気合い入れたり」

光がそう言うと、東間もまた何も言えなくなってしまった。

「……俺、これからはもう少し真面目になろうと思う」

東間は驚いた様に顔を上げた。光の言葉があまりにも意外だったから。

光は悔しさの中に決意を秘め、ゆっくりと顔を上げた。

「……このままじゃ、縦妻香織にも顔向け出来ない」

体育館の振動が、壁を伝って背中に届く。

「……………」ああ」

東間は少しだけ笑って頷いた。

午後二時四十分。現地解散となった光と東間は、体育館前から出ているバスに乗り、それが動き出すのを待っていた。

「来年、また頑張ろう。それまでには俺もレギュラーに入れるようにする」

「……、おう」

二人の表情は、先程と比べるとほんの少しだけ明るく、気持ちは既にこの先へと向いているようだった。……もちろん、それは二人がそうあるうという理想であって、実際にはまだ直前の屈辱が残っている。

「……………」

光と東間は何も言わずとも会話を止め、目を瞑った。

『間もなく出発します』

車内にアナウンスが流れ、扉が閉まり掛ける。

だが、急いでこちらに走ってくる人がいる事に運転手が気付き、閉まり掛けた扉はもう一度開いた。

「す、すいません……ありがとうございます」

縦妻香織はそう言って、慌ててバスへと乗り込んだ。

名優尻向けてもそれは華

高々と空を舞ったボールは、惚れ惚れしてしまう程に美しくゴールのネットをすり抜ける。

「マジかよ……開清ってこんなに強かったか!？」

「北高相手にボロ勝ちじゃねーか」

開清の圧倒的優勢を物語るダブルスコア。北高の選手達は皆息を切らして疲れ果て、やがて膝に手を付き足を止める。

マークマンの上から叩き込む豪快なダンク。整ったシュートフォームから放たれるシュート。開清は、北高に対して大差で勝利を収めた。

「光くん！ おめでとう！」

「香織！」

光の元に駆け寄ってくる女生徒。それは、あの縦妻香織だった。「おめでとう！ ほんとに北を応援しなきゃダメなんだけど……光くんが勝って良かった」

香織は恥ずかしそうに、もしもと言葉を詰まらせながら光の勝利を喜んでいる。

「かつこよかった……本当に」

「香織……」

二人は、必然的に見つめ合った。最早余計な言葉など必要とせず、次第に二人の距離は近付いてゆく……。

「 光、光！」

誰かが自分を呼んでいる。光は戸惑いながらもゆっくりと目を開けた。

(……いつの間に……)

着慣れたいつものチームジャージ。脚に残った試合の疲労。光は

バスに乗った直後から深い眠りについてしまっていた。

「お、おい光！ 起きろって！」

もう起きているというのに、東間は光の体を揺らし続ける。

バスはちょうど停留所の前で停まっており、揺れの無い落ち着いた車内が光の睡眠欲を促進させる。

「……もう起きたっつーの……」

光はそう言って、鬱陶しそうに体を背けた。敗戦のショックと、純粹な疲労とで光の瞼はまだ重い。

「良いから……起きろってば！ 縦妻香織がいるんだよ！」

東間は死体のような光の体を重たそうに引き上げる。しかし東間の言葉がしっかりと頭に行き届くと、光はそんなものなど必要無いとばかりに飛び上がった。

「外！ ほら、今あそこ歩いてる……」

運転手が再びアクセルを踏み、バスが微かに動き出したのと同時に東間は窓の外を指差した。

春風になびく、透き通った栗毛。

それは小柄な体に信じられない程に似合っていて、気が付けば、光は香織の後姿に見惚れてしまっていた。

それでも、バスは無情に走り出す。あっという間に加速して、香織の姿は見えなくなった。

「……顔、見えた？」

東間は窓の外に向けた目をそのままに聞いた。

「いや、後姿だけ……」

光もまた、呆然と外を眺めたまま答えた。

車内から見える景色は次から次へと移り変わり、それはそのまま光と香織の距離を遠ざけてゆくようだった。

「でも……うん」

光は窓から体を離し、姿勢を整えて椅子へと座り直した。

「何？」

「いや……、何でも無い」

その顔はとても晴れやかで、それを見て東間は、二人の将来を直感的に感じていたとか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9914g/>

矛盾恋愛

2010年10月17日03時44分発行